

2022年8月14日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

ルカによる福音書 24 : 13～32

イザヤ書 52 : 13～53 : 12

「一緒に歩くイエスさま」

【前奏】

【招詞】 詩編 100 : 1～3

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 52 : 13～53 : 12、ルカによる福音書 24 : 13～32

【説教】 「一緒に歩くイエスさま」

<復活の日の朝>

今日の御言葉に語られている出来事は、イエスさまが復活なさった日、ある二人の弟子たちに起こった出来事です。

この二人の弟子は、イエスさまの十字架の死を目撃した人たちです。そしてそれから三日目の朝に、イエスさまが復活したという知らせを聞きました。しかし、そのことを信じられずにいた。そんな彼らに、復活のイエスさまご自身が会って下さり、聖書を説き明かして下さい、というのが、今日のところで語られている出来事です。

わたしたちは、今週と来週、前半と後半に分けてこの箇所の御言葉を聞こうとしています。ここに語られている出来事は、まさにここにいるわたしたちが、復活のイエスさまと出会う時のことが記されているとも言えるでしょう。

今日登場する二人の弟子に限らず、わたしたちにとっても、誰にとっても、イエスさまの十字架と復活の出来事は、聞いても、教えられても、素直に信じるのは困難なことなのではないでしょうか。

イエスさまが成し遂げて下さった救いの出来事、つまり、神の御子がまことの人となり、ご自分の死によってわたしたちの罪を償って下さるということ。そして、死者の中から復活し、わたしたちにも復活と永遠の命を約束して下さい、ということは、わたしたちの経験も、知識も、思いも、常識も、遥かに超えている、神さまの出来事です。

ですから、わたしたちは、イエスさまの救いを信じるという時、何か合理的な説明を聞いて納得したり、知識として理解して信じられるようになるものではありません。

そうではなくて、わたしたちの信仰は、十字架によって救いの御業を成し遂げ、死者の中から復活して生きておられるイエスさまご自身と出会うことによって、与えられるのです。

復活なさったイエスさまが、どのようにしてわたしたちと出会って下さるのか。どのようにしてわたしたちの目が開かれるのか。そして、どのようにして復活のイエスさまを確信する者となり、どのようにして、今度はイエスさまを宣べ伝える者とされていくのか。

わたしたちはそのことを覚えながら、二人の弟子に起こった出来事を聞いていきたいと思
います。

<エルサレムを離れる>

さて、本日登場する二人の弟子のうち、一人の名前は 18 節に「クレオパ」と出てきます。
しかし、もう一人は誰なのか分かりません。この二人は、イエスさまの十二弟子のメンバー
ではありませんでしたが、イエスさまの教えを聞き、数々の奇跡を見て、イエスさまを力あ
る預言者であると信じて従っていた、大勢の弟子たちの中の二人です。

13 節以下には、「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れ
たエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた」とあ
ります。

「ちょうどこの日」。「この日」とは、イエスさまが十字架につけられ、死んで葬られてか
ら三日目にあたる、週の初めの日のこと。今のカレンダーで言えば、日曜日のことです。

この日、彼らはエルサレムを離れて、六十スタディオン、分かりやすく直すと、約 11 km
離れた、エマオという村へ向かおうとしていました。

エマオへ向かう道中、二人は「この一切の出来事について話し合っていた」とあります。
「一切の出来事」とは、イエスさまが十字架につけられて死んでしまったこと。そして、そ
の日から三日目にあたる、この日の朝早くに起こった、不思議な出来事のことです。

それは、婦人たちが今朝早く、イエスさまが葬られたお墓に行ってみると、中が空っぽで、
イエスさまのご遺体が無くなっていた、というのです。そして、その空っぽの墓に二人の天
使が現れて、こう告げたと云います。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」。

みんな信じませんでした、これを聞いたペトロは、立ち上がって墓へ走って行きました。
そしてペトロも、墓の中には亜麻布しか無かった、と言うのです。

このことは、本日の聖書箇所直前、24：1～12 に語られていました。

イエスさまの復活の知らせを、誰も信じられませんでした。しかし、かつてイエスさまは、
十字架につけられる前、弟子たちに向かって、ご自分が「罪人の手に渡され、十字架につけ
られ、三日目に復活することになっている」ということを、何度もお語りになっていました。
これらの出来事は、既にイエスさまによって繰り返し予告されていたことだったのです。

しかし、復活の日の朝、空っぽの墓を見ても、天使が復活を告げても、誰一人そのことを
信じるのが出来ませんでした。婦人たちも、墓が空っぽなのを確かめたペトロも、驚きは
しましたが、不思議に思ったまま、家に帰ってしまったのです。

そして二人の弟子も、これらのことを聞いて、一体、この今朝の出来事はどういうことな
のだろうと、話し合いつつ、論じ合いつつ、しかしすでにエルサレムから離れて、エマオへ
と向かっていました。

なぜなら、信頼して、弟子となって従っていたイエスさまが、このエルサレムで、十字架という最も残酷な刑で、犯罪人の一人として、神に呪われているとされる仕方で、処刑されてしまったのです。しかも、弟子である自分たちは、その十字架の前に、ただ遠くから見ていたしかなかった。その方を見捨ててしまった。そこには、耐えきれないような罪悪感もあったかも知れません。

さらに、もしかしたら自分たちも、あの処刑されたイエスに従っていた者たちだ、ということで、危険な目に遭うことがあるかも知れません。

本来エルサレムは、美しく立派な神殿がある神の都であり、ユダヤ人たちの宗教的な、精神的な拠り所となっている町です。しかし、今の彼らにとっては、もはや一刻も早く逃れたい、遠く離れてしまいたい、忌まわしい、悲しい、危険な場所になってしまったのです。

<暗い顔>

ところが、そのエルサレムを離れた道中のことです。15 節には「イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」とあります。なんと、復活なさったイエスさまご自身が近づいて来て、この二人と一緒に、その道を歩き始められたというのです。しかし、16 節には、「二人の弟子の目は遮られていて、この方がイエスだとは分からなかった」とあります。

イエスさまは、この二人の弟子に、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」とお尋ねになりました。すると、「二人は暗い顔をして立ち止まった」とあります。愛する人を失った顔です。希望を失った顔です。混乱し、不安を覚えている顔です。危険を感じ、恐れ慄いている顔です。

わたしたちも、人生の歩みの中で、度々、このような「暗い顔」をすることがあります。それは、目が遮られている時の顔です。

「遮られる」という言葉は、元の言葉では「捕えられる」「留められる」という意味があります。悲しみを覚えたり、不安を感じたり、絶望するような出来事を前に、その現実が目、心が、捕らわれてしまう。そして視野が狭くなり、目が遮られて、他のことが何も見えなくなってしまうのです。

そうすると、捕らわれている現実や、自分の心の思いだけを見つめるようになり、さらに暗く深いところへ沈んでいき、そこに視線が、心が、留まってしまいます。

特に、わたしたちにとって「死」というものは、圧倒的な力であり、人間にとっては抵抗しようのない現実であり、わたしたちの心を強く捕らえ、支配してしまいます。

この時、二人の弟子の目と心は、イエスさまの十字架の死の現実には捕らわれていました。遮られていました。しかし、実は一方で、この時、復活なさったイエスさまが、二人の目の前に立っておられることも、まことに確かな現実だったのです。

復活なさったイエスさまは、幽霊などではありません。確かに復活の体をもって、約束なさっていた通り、死者の中からよみがえられたのです。そしてこの時、確かに二人の弟子の目の前に、立っておられるのです。二人の目に、はっきりと映っているのです。

しかし二人は、イエスさまが確かに死んで葬られたことを知っています。その目で見ています。そして、その現実が心を支配してしまっています。そのように、死に捕らわれ、目を遮られているために、自分たちに語りかけておられる方がどなたか分からないのです。

「イエスさまが復活なさった」という知らせは、確かに二人の耳に届いていました。しかし、その心には、まったく届いていなかったのです。

<おかしい質問>

さて、二人の弟子たちからすれば、いつの間にか一緒に歩いていた人が、「その話は何のことですか」と聞いてきたことは、呆れてしまうような質問でした。

この人も向かっている方向が一緒なのですから、エルサレムの町からやって来たに違いありません。エルサレムにいながら、エルサレムで起こったあの騒動、あのナザレのイエスの十字架の出来事を知らないなんて、あり得ないことでした。

クレオパは、「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか」と言いました。

イエスさまは、「どんなことですか」と聞き返します。しかしこの時、本当はこの方だけが、すべてを知っておられました。

イエスさまは、強引な仕方でも、ご自分を分からせようとしたり、信じさせたりしようとはなさいません。イエスさまは、一人一人、それぞれが抱えている心の思いを押し殺させたり、黙らせたり、迷いや、悩みや、苦しみを、なかったことにはなさいません。

イエスさまは、本人たちが気付かない内から、そのずっと前から、歩調を合わせ、共に歩み、語りかけてくださっています。そして、あなたの思いを、あなたの悲しみを、あなたの苦しみを、あなたの絶望を、「どんなことですか。話してごらん。」そう言って、心の思いを打ち明けるよう促して下さり、語らせて下さり、耳を傾けて下さるのです。

わたしたちは、自分の思いを、心の内を、この方に訴えて良いのです。苦しいです、悲しいです、不安です、怖いです、絶望しています、訳が分かりません…。それらを、イエスさまがすべて聞いて下さり、受け止めて下さいます。

イエスさまの「どんなことですか」という問いに、二人の弟子は、語りはじめました。19節以下のところを見てください。

「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放して下さると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

二人の弟子は、イエスさまが「イスラエルを解放してくださると望みをかけていた」と言います。この時代、ユダヤ人たちはイスラエルの国家を失い、ローマ帝国の支配下にありました。ですからユダヤ人たちは、この二人の弟子も含めて、神さまが遣わして下さる救い主によって、イスラエルが他国の支配から解放され、自分たちの国が再建されることを期待していました。いつかその救い主、メシアが現れるということは、旧約聖書に預言されていることでした。

そして、とうとう、神と民全体の前で、まさに行いにも言葉にも力ある方が現れました。それが、イエスさまでした。彼らは、このイエスという方こそ、神が遣わして下さった救い主であり、イスラエルの王になる方であると信じ、喜んでイエスさまに従ったのです。そして、エルサレムの都に入られる時には、まさに王さまであるかのように迎え入れたのです。

ところが、自分たちユダヤ人の指導者たちが、イエスさまを死刑にするために引き渡し、十字架につけて殺してしまいました。イエスさまに、イスラエル王国復興の望みをかけていたのに、その望みは虚しく消え去ってしまいました。

しかも、そのような救い主だと思っていた方が、犯罪人として、神に呪われていると言われる仕方で、残酷に十字架で処刑されてしまったのです。

さらに、それから三日目の今日、墓から遺体が無くなり、天使が「イエスは生きておられる」と告げた。もう、混乱の極みです。

彼らは言います。「仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

目の前におられるイエスさまご自身に向かって、「あの方は見当たりませんでした」と言うのです。イエスさまご自身の前で、「あなたが見当たらない。あなたはいない」と言っているのです。

この二人の弟子の姿は、とても、滑稽で、悲しく、愚かです。しかし、この姿こそ、目が遮られている、弱いわたしたちの現実の姿です。

自分の思いでしかものを見られず、目の前の出来事に捕らわれ、目を遮られて、自ら悲しみと絶望の中に留まっています。そばにいて、共に歩いて来て下さり、語りかけ、耳を傾けて下さる方を、目を上げて見ようともしていないのです。

神さまの救いのご計画は、彼らが考えるような、イスラエルの解放、地上の王国の再建、というようなことではありませんでした。もっと広く、大きく、深い、すべての人間を罪から解放し、神の国を建て上げる、そのような救いの御業だったのです。

神さまの御心は語られています。神さまの救いの出来事は知らされています。目の前に、救い主は立っておられます。しかし、自分の思い、自分の経験、自分の考えに捕らわれて、何も聞こえていない。何も見えていない。これが、わたしたちの姿です。

<聖書の説き明し>

さて、二人が語り終えると、イエスさまは言われました。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。」

そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された、とあります。

ここでの「聖書全体」とは、旧約聖書のことです。旧約聖書には、神さまが選ばれた民であるイスラエルに与えられた、「救いの約束」が記されています。

そして旧約聖書には、まさにその救いの約束の実現のために、26 節に語られているように、「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだった」ということ。つまり、神さまがこの世に遣わされるメシア、救い主は、人々を救うために、苦しみを受け、殺されなければならない。それから、栄光をお受けになるのだ、ということが語られていました。今日読まれた旧約聖書のイザヤ書は、まさにその箇所です。

二人の弟子は、旧約聖書を確かに知っていました。しかし、自分の都合の良いところ、分かるところしか受け入れていなかったのです。なぜなら、自分たちのヒーローであり、王となるべきメシアが、苦しみを受けて殺されるなど、受け入れがたい、理解できないことだったからです。

しかし、イエスさまは、これらの旧約聖書に語られていることが、まさに「ご自分について書かれていること」である、と語られました。「メシアが苦しみを受けて、栄光に入る」と書かれていたことは、十字架につけて殺され、そして復活した、このわたしを指し示しているのだ、ということの説明なされたのです。

この時、イエスさまは、この二人の弟子に、聖書の御言葉の説き明かし、つまり「説教」をなされたのです。

エマオに向かって歩く道は約 11 km、ゆっくり歩いて二時間半から三時間くらいでしょうか。たっぷりの時間をかけて、イエスさまは聖書の御言葉を説き明かして下さいました。

暗い顔をしていた二人は、夢中になって聞いたのではないのでしょうか。時間はあっという間に経ち、いつの間にか日も暮れかけ、エマオの村が近づいていました。

二人の弟子はまだ、目の前にいる方が、復活なされたイエスさまだとは気づいていません。しかし、二人の心は、明らかに変わり始めていました。

後で二人の弟子は、32 節にあるように、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さいたとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合いました。

エルサレムから逃げるように、悲しみと絶望の中を、暗い気持ちで出発した二人でした。ところがイエスさまが近付いてきて下さり、語りかけて下さり、それにお答えをし、聖書の説き明かしを聞いた。そのイエスさまとの対話の中で、交わりの中で、共に歩む中で、二人の心は、確かに燃え始めたのです。明るい、熱い炎が、二人の暗い心を照らし始めたのです。

<イエスさまとの出会いによって>

さて、今日聞く御言葉はここまでにしたいと思います。

次週は、二人の弟子が、この後イエスさまを無理に引き止めて、宿を取ります。そこで、食卓を共にして、イエスさまがパンを裂いて渡して下さった時、やっと二人の目が開け、目の前にいる方がイエスさまだと分かるのです。

それはつまり、二人の弟子は、今日の所で、すでにイエスさまが目の前におられて、聖書の説き明かしを聞かせてもらい、心も熱く燃え始めていたのに、この時点ではまだ、イエスさまであることが分かっていない、ということです。

最初に申しました通り、このエマオの出来事は、わたしたちの物語だと言えます。

ある人は、クレオパと共にいる、名前が分からないもう一人の弟子は、「わたし」なのだ、と言いました。わたしたちもまた、日々の歩みの中で、目の前の現実に関心を捕らえられ、目を遮られ、暗い顔をして、人生の道を歩んでいたのです。

しかし、イエスさまは、すでに共におられます。すでに一緒に歩いて下さっています。

そして、この二人の弟子に起きたことは、まさにここ、教会で起こっていることであるとも言えます。

毎週、教会の礼拝では、説教、つまり聖書の説き明かしがなされています。聖書の御言葉の説教を通して、神さまの救いのご計画と、それを十字架と復活によって実現して下さった、救い主イエスさまのことを聞いているのです。

しかし、おそらく殆どの方が、はじめは、聞いてもすぐにはこのことが信じられないし、イエスという方がどなたか、分からないのではないのでしょうか。救い主はどこにおられるのだろう。救い主が見当たらない。そう思っているのではないのでしょうか。

しかし、御言葉を聞くうちに、心が燃やされて、自分が捕らわれている現実ではなく、神さまの恵みの現実へと、わたしたちの心は向けられていきます。

そしてわたしたちは、救いを成し遂げて下さった方が、わたしに伴いつつ、語りかけつつ、また耳を傾けて下さりつつ、ずっと目の前にいて下さったのだと。あの、望みを失い、暗い顔をして歩んでいた時も、ずっと共に歩いて下さっていたのだと、気付かされていくのです。

目を遮られていたわたしたちは、御言葉の説き明かしを通して、共にいて下さるイエスさまへと、目が開かれていきます。

そして、心が燃やされ、この方と共にいたいと願う時、わたしたちは、ずっと共にいて下さったこのイエスさまが、まことの神の御子であり、わたしの救い主であると、信じ、受け入れる者とされていくのです。

そして、次週に示される、イエスさまの食卓は、まさに、教会で行われている聖餐の食卓と言えるでしょう。ここにおいて、復活し生きておられるイエスさまの救い恵みの現実を、具体的に、確かに、わたしたちの現実として味わうことが許されるのです。

わたしたちの信仰は、このように、復活し生きておられるイエスさまとの出会いによって、与えられ、確かにされ、養われ、力づけられていきます。

信仰とは、このようにイエスさまに生かされ、イエスさまと共に生きていく、ということに他なりません。

今、わたしたちも、まさに聖書の御言葉を通して、今ここに共にいて、語りかけ、耳を傾け、共に歩んでくださる、復活のイエスさまと出会っているのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

目の前の現実に、心の思いに、悲しみや絶望に、すぐに捕らわれ、目が遮られてしまうわたしたちを憐れんで下さい。わたしたちが暗い顔をしている時も、イエスさまが共にいて下さることに気付いていない時にも、十字架と復活の御業を成し遂げられたイエスさまは、わたしたちと共に歩み、語りかけ、信仰へと導いて下さっています。

今も、主がわたしたちと共におられます。どうか、わたしたちの心を燃やして下さい。目を開き、耳を開き、心を開いて下さい。復活し、生きておられるイエスさまとの出会いと、その御言葉と、あふれるばかりの恵みの中で、あなたの御許へと導いて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 281 「大いなる神は」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン